金沢市

俵ニカヤマノヤマ丁場跡

２００７

石　川　県　教　育　委　員　会

(財)石川県埋蔵文化財センター

俵(たわら)ニカヤマノヤマ丁場(ちょうば)跡(あと)

2007

石川県教育委員会

(財)石川県埋蔵文化財センター

例　言

1　本書は俵ニカヤマノヤマ丁場跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地は金沢市俵町地内である。

3　調査原因は道路バリアフリー化促進（交安１種）工事　一般県道芝原石引町線であり、同事業を所管する石川県土木部道路整備課が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。

4　調査は財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成17(2005)年度から平成18年度（2006年）にかけて実施した。業務内容は現地調査、報告書作成・刊行である。

5　調査に係る費用は、石川県土木部道路整備課が負担した。

6　現地調査は平成17（2005）年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者（当時）は以下の通りである。

期　間　平成17（2005）年４月27日～同年５月27日

面　積　400㎡

担当課　調査部調査第４課

担当者　伊藤雅文（調査第４課長）、和田龍介（主任主事）、伊藤さやか（調査嘱託）

7　報告書の作成・刊行は平成18（2005）年度に実施し、調査部調査第４課が担当した。執筆分担は下記の通りである。編集は和田龍介（調査第１課主任主事）が行った。

第１章～第３章　伊藤さやか（金沢城研究調査室嘱託）

第４章　和田

8　調査には下記の機関、個人の協力を得た（五十音順、敬称略）。

石川県土木部道路整備課、県央土木総合事務所、金沢城研究調査室

なお、現地調査～報告書刊行に至るまで冨田和気夫氏（金沢城研究調査室調査専門員）から多大なご指導・ご助言を賜った。

9　調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保存している。

10　本書についての凡例は下記の通りである。

（１）方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅷ系に準拠した。

（２）水平基準は海抜高であり、T.P（東京湾平均海面標高）による。

11　引用・参考文献等は巻末に一括して掲載している。

目　　次

第１章　遺跡の位置と環境……1

第１節　自然・歴史的環境……1

第２節　戸室石切丁場の既往の調査……1

第２章　調査に至る経緯と経過……4

第１節　調査の経緯……4

第２節　調査の経過……4

第３章　俵ニカヤマノヤマ丁場跡の成果……7

第１節　基本層序……7

第２節　遺　　構……7

第３節　遺　　物……8

第４章　ま　と　め……12

挿図・写真図版目次

第１図　遺跡位置図……1

第２図　石引道と俵ニカヤマノヤマ丁場跡……2

第３図　戸室石切丁場の分布……3

第４図　調査区位置図……5

第５図　調査区配置図……5

第６図　遺構全体図……9

第７図　土層断面図①……10

第８図　土層断面図②……11

図版１

図版２

図版３

図版４

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　自然・歴史的環境

第１図　遺跡位置図（S＝1,800,000）

俵ニカヤマノヤマ丁場跡は、金沢城から南東に７km の金沢市俵町地内に位置する。金沢城の石垣普請に伴う石切場として、戸室山・キゴ山を中心にその一帯に形成された「戸室石切丁場」を構成する丁場の一つである。

戸室山は、その山体を作る溶岩円頂丘（溶岩ドーム）と、火山活動に伴う火砕流堆積物で形成されている。溶岩円頂丘の年代は、50～60万年前である。後の１万８千年前に、爆発によって西側山腹が崩壊し、山麓に岩屑（火山泥流）が流出した。その火山泥流は、中期更新世前半（80～50万年前）の卯辰山層を侵食した谷地形を覆い、平坦な台地地形を形成している。その範囲は、戸室山の西方約２キロの地点まで広がり、本遺跡はその西端に含まれる。

溶岩円頂丘は、角閃石安山岩（戸室石）からなっており、一般的には青灰色を呈し（通称「青戸室」）風化すると紅褐色（通称「赤戸室」）に変化する。

金沢城の歴史は、織田信長の命を受けた佐久間盛政によって、天正８（1580）年金沢御堂が滅ぼされたことから始まる。盛政は御堂陥落後、御堂跡を金沢城として在城し、城下町造りが開始される。天正11（1583）年、盛政に替わって前田利家が入城し、本格的な城下町の整備が行われた。金沢は、これ以降藩政期を通して前田家の城下町として発展することになる。

金沢城の石垣整備に関しては、記録上では文禄元（1592）年の本丸高石垣普請を嚆矢とする。以後、慶長４（1599）年内総構堀構築、慶長15（1610）年外総構堀構築など、多くの石垣が構築される。寛永８（1631）年、金沢城下大火により金沢城類焼、本丸・二ノ丸などが焼失、宝暦９（1759）年、城下大火の大半が焼失するなどの災害等により修繕が続いていく。これら石垣構築・整備に関してはそのほとんど全てに戸室石が用いられてきた。その戸室石の産地として、戸室石切丁場は江戸時代を通じて約700箇所にのぼる採掘跡を残しながら営まれていく。

第２節　戸室石切丁場の既往の調査

戸室石切丁場の調査は、金沢市教育委員会によって行われた、金沢の石切り緊急調査（昭和59～61年度）に始まる北島俊朗氏の一連の調査研究が最初の、まとまったものである。その後平成13年度に金沢城の包括的な調査研究を目的として、石川県教育委員会内に金沢城研究調査室が発足した。金沢城研究調査室は、石垣構築技術の基礎的調査の一環として戸室石切丁場の埋蔵文化財調査・研究に着手し、現在も継続中である。平成13（2001）年から分布調査が始まり、東西約3.5キロ、南北約３キロの範囲で約700地点の採掘跡を確認しており、平成15年度（2003）から確認調査が進められている。

採掘地の現況は、傾斜地なら半円形か馬蹄形、平坦地なら楕円形の窪地が良く見られる。傾斜地での採掘は、その排土は傾斜地の下方にかき出され、坑底から排土山にかけて平場が形成されることが多い。平坦地の採掘坑は、その周りに土手状に排土が残されることが多く、人為的に埋め戻されることはほぼない。採掘坑内には、自然礫の小片や加工痕を伴う石が散乱していることが多い。

戸室石切丁場内の丁場跡は、石材の状況や採掘坑の規模、文献記録などから5群に分類されており、各群の特徴は以下の通りである。またそのそれぞれの採掘坑の分布する範囲を地図上に示したのが第3図である。

Ⅰ　3～4mの小型採掘坑群からなる区域である。矢穴石などの加工石片が確認できない区域。

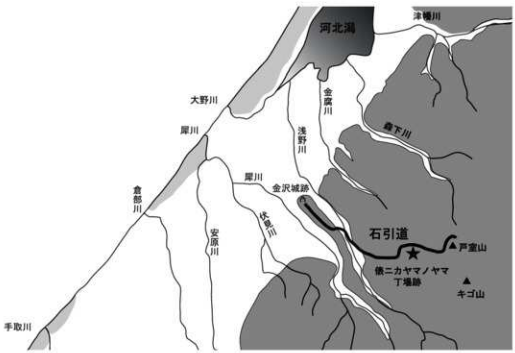
Ⅱ　小型採掘坑群であるが、17世紀初頭（慶長）の石材や加工石片が確認できる区域。

Ⅲ　10m位の中型採掘土坑が主体で、17世紀前葉（寛永）の石材を残す区域。

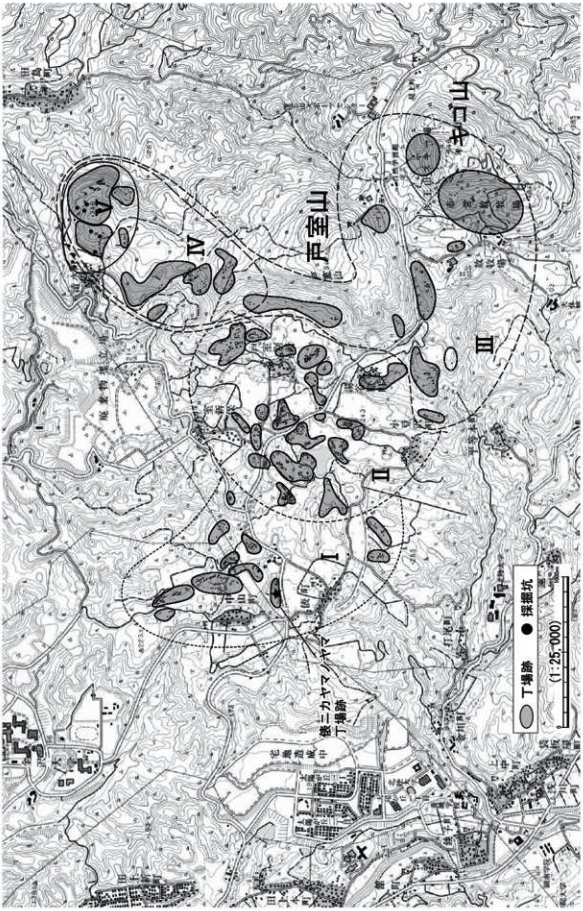
Ⅳ　残石や文献から17世紀中葉（万治・寛文）頃の採掘想定域。

Ⅴ　文献に登場する18世紀後半以降の「戸室山御丁場」の範囲で、近代から近世にかけての大規模採掘が継続し、20m超の大型採掘坑が多く営まれた。

本遺跡は、周辺の遺跡の踏査や確認調査の結果、西側に広がる低丘陵地の中に位置し、中山町～俵町西側を範囲とするⅠ類に属していることになる。同類は近世初期の石切丁場と想定されるが、今日まで分布調査が行なわれているのみで確認調査は行われていない。



第2図　石引道と俵ニカヤマノヤマ丁場跡



第３図　戸室石切丁場の分布（国土地理院2003図を一部改変）

第２章　調査に至る経緯と経過

第１節　調 査 の 経 緯

本調査は、道路バリアフリー化促進（交安１種）工事　一般県道芝原石引町線に伴うもので、歩道新設および歩道北側の急斜面の法面保護工事が当該地に生じることとなった。金沢城研究調査室の事前踏査により、当該地が俵ニカヤマノヤマ丁場跡に含まれることがわかったため、県央土木総合事務所長より石川県教育委員会教育長宛てに試掘調査の依頼があった。平成16年10月14日に石川県教育委員会文化財課が試掘調査を実施したところ、当該地とその周辺に石垣石材採掘に伴うと考えられる土坑などが確認された。確認後の協議に基づき、平成17年３月23日付で県央土木総合事務所長より発掘調査の依頼が石川県教育委員会に提出されたことを受け、平成17年４月１日石川県教育委員会と(財)石川県埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の間に発掘調査委託契約が交わされた。調査は調査部調査第４課が担当した。

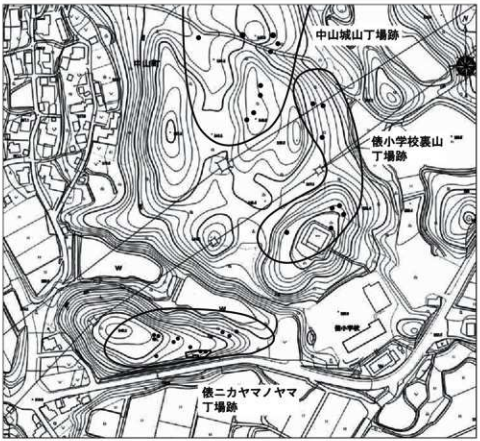
平成17年４月18日に県央土木事務所・県教育委員会文化財課・埋文センターとの間で現地協議が行われた。県央土木事務所は年度内の工事完了を予定していることから、早急な発掘調査の実施・完了を要望、文化財課・埋文センターは４月内の着手～５月末までの完了の見通しを県央土木側に伝え、それに伴い調査範囲・調査箇所の優先順位・安全管理・作業員の雇用・プレハブ設置場所・駐車場などを確認した。

第２節　調 査 の 経 過

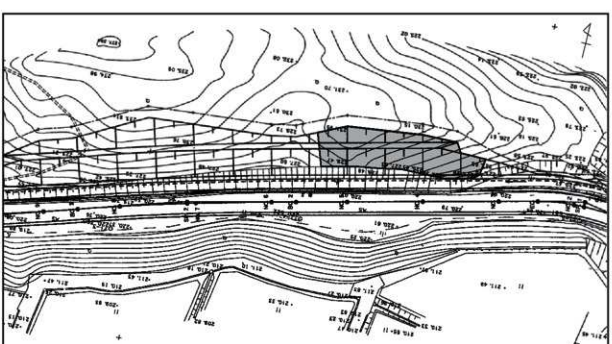
４月27日より重機による表土除去後、遺構確認をおこなう。結果、黒褐色土が広がる地点があること、調査区南側は大幅に撹乱を受けていることが判明した。また、北側の高台と南側の低い部分では、遺構の残存状況などが異なることが判明した。地山の堆積状況を確認するため、調査区北側のラインに沿うようにトレンチを設定し、掘削を行うとともに、南側の低い部分の北壁の土層の観察もおこなった。北側のトレンチは遺構確認面から40～120センチの深さまで掘削した。表土や整地層の層厚は尾根付近では80㎝、傾斜地では０㎝の地点もあった。南側低地部の北壁の観察の結果、黒色土を覆土にもつ落ち込みが確認出来た。遺構の有無を確認するために、調査区の南北方向に①～⑤の５本の土層観察あぜを設定し、観察を行った。あぜ②のラインを中心とする11号土坑が確認された。あぜ④のラインでは、12号土坑が確認された。

標高は、230.95ｍから229.14ｍ、7.5ｍの距離で高低差1.81ｍ、コンターラインに対して、比較的垂直な方向で設定した土層観察あぜ②の地点で、231.64ｍから230.40ｍの7.70ｍの距離で高低差1.24ｍである。

金沢城研究調査室の事前踏査により、調査地を含む俵ニカヤマノヤマ丁場跡では12基の採掘坑が確認されており、内11・12号土坑が調査地内に含まれていたが、調査で新たに13号土坑を確認することができた。結果３基の採掘坑（土坑）の調査が行われ、採掘に伴う多量の石材小破片や未掘？の大型石材を確認した。採掘に伴う遺物は石材片を除き出土せず、石材にもノミ跡・矢穴などの加工痕、刻印などは認められなかった。また丁場の遺構面から縄文時代と考えられる土器小片がわずかに出土したが、土器に伴う遺構などは確認できなかった。



第４図　調査区位置図（Ｓ＝1/2,500）



第５図　調査区配置図（Ｓ＝1/1,000）

平成18年度に報告書の印刷・刊行を行った。伊藤さやかが在職時に作成した原稿・図版を元に、和田が調整・編集を行った。

調査日誌抄

4月20日	借り上げ機材打ち合わせ（フェンスなど）
4月21日	重機・ダンプ打ち合わせ
4月22日～	崖線に排土・岩石等の道路転落防止のため、ネットフェンス設営等の養生を行う。
4月26日	現況測量を行う。
4月27日～	表土除去、
4月28日	仮設建物立ち上げ、機材搬入。
5月9日	連休明けより作業員投入、調査開始。
5月10日	遺構検出状況写真
5月16日	文化財課、金沢城研究調査室と調査の進め方等を協議する
5月23日	遺構掘削終了の写真撮影
5月25日	コンター図測量
5月26日	土層断面測量完了。現地発掘調査の完了。
5月27日	県央土木事務所へ現地引渡し
5月30日～	機材撤収
6月2日	プレハブ用地地権者・県央土木・埋文センターにより事後確認。

事前測量風景

第３章　俵ニカヤマノヤマ丁場跡の成果

第１節　基　本　層　序

本遺跡の位置する地形は、南側に谷部をもつ山地の傾斜面状であり、南方向に急峻な斜面、東側にやや緩やかに下る緩斜面を呈する。検出遺構面は黄褐色～赤橙色土を地山とし、地山土中には戸室石大～小礫を豊富に含む。一部の地山面上には黒褐色土が堆積しており、遺物こそ出土しないが近世前の包含層が一部残存していたものと推定できる。

北壁土層断面（第７図）

第１層　表土　腐葉土のような土。
第２層　黒褐色土層。径１～20㎜位の礫を含む。暗褐色土を含む。しまり、粘性あり
第３層　黄褐色土層。黄褐色土の地山土の二次堆積土と思われる。径１～20㎜のブロックを主体とする。しまりやや弱、粘性あり。
第４層　黒褐色土層。７層より黄褐色土や赤橙色土などの含有物多い。
第５層　赤橙色土層。赤橙色地山の二次堆積土と思われる。
第６層　暗褐色土層。黄褐色土を少量含む。
第７層　黒褐色土層。赤橙色土粒子が若干混入するが、他は含有物少なく、きめ細かい土。
第８層　暗褐色土層。黄褐色土を少量含む、きめの細かい土。
第９層　褐色土層。黄色土を少量含む。
第10層　淡赤橙色土層。暗褐色土を少量含む。
第11層　黄褐色土層（地山）。流土の様相を呈し、大礫を多く含む、締まりのないボロボロの土。一部戸室石が風化して、～径２㎝ほどの小礫になったものを多量に含む部分も存在する。
第12層　赤橙色土層（地山）。礫を含まない～若干小礫を含む。起伏がある。

第２節　遺　　構

11号土坑（第６図）

位置

調査区中央付近に位置する。確認面の標高は231.125m である。

形態

事前踏査の際に、採掘坑と推測されていた土坑である。南北方向に設定した幅50㎝のあぜ②では土坑の形状の把握が難しいが、平面形では捉えることが出来る。南側が撹乱されていたため、確認できた範囲の平面形はほぼ半円形である。規模は、長軸で330㎝、深さは確認面から約50㎝である。底面は浅い皿状で起伏に富み、壁面はなだらかに立ちあがる。排土山の有無は確認できていない。

覆土（第７図あぜ②）

基本土層の２層目で埋め戻されている。

２層　黒褐色土層。径１～20㎜位の礫を含む。暗褐色土を含む。しまり、粘性あり

出土遺物　なし

12号土坑（第６図）

位置

調査区北西、11号土坑に東接して位置する。確認面の標高は230.6m である。

形態

事前踏査の際に、採掘坑と推測されていた土坑である。南側の上端は撹乱を受けており不明であるが、平面形は少し歪んだ帯状と想定される。規模は、復元値で長軸550cm、短軸200cm、深さは確認面から約50cmである。西側は急に、東側は緩やかに立ち上がる。底面は起伏に富んでいる。

覆土（第８図あぜ④西・東面）

黒褐色土と黄褐色土が互層に堆積する。自然地形が北側上方から南側下方に傾斜しているのに対し、覆土は南側上方から北側下方というように、山の稜線に対して直交する方向で堆積している。これは人為的な埋め戻しの結果生じたものと思われる。覆土のほぼ半分が地山で構成されているが、堆積状況からは風倒木痕の可能性は低い。

通常、足場や道を作るなどの必要がない限り採掘坑は埋め戻されることは少なく、傾斜地においては採掘坑より下方に排土をかき出すことが多い。12号土坑については、下方から埋め戻しを行うという、より労力を要する方法が選択されていることもあり、11号・13号土坑とは性格の異なる土坑の可能性もある。

第１層　暗褐色土層。黄褐色土層を少量含む。しまり、粘性やや弱。
第２層　黄褐色土層。地山の黄褐色土を主体とし、暗褐色土を少量含む。しまり、粘性やや弱。
第３層　黒褐色土層。
第４層　赤橙色土層。桃色の土を主体とし、若干黒褐色土を含む。しまり、粘性あり。
第５層　黒褐色土層。しまり、粘性あり。少し黄褐色土や赤橙色土を含む。
第６層　黄褐色土層。黄褐色土の地山土の二次堆積土と思われる。径１～20mmのブロックを主体とする。しまりやや弱、粘性あり。

出土遺物　なし

13号土坑（第６図）

位置

調査区南西端に位置する。確認面の標高は230.5m である。

形態

調査時に確認された採掘坑である。明確な上端は不明であるが、平面形は不整円形であろう。規模は270cm、深さは確認面から約50cmである。遺構底面では、長軸80cm強の大きな石が確認できた他、遺構の周辺にも大きな石が見られた。特に遺構南側に排土山のようなものは見られなかった。

覆土（第８図）

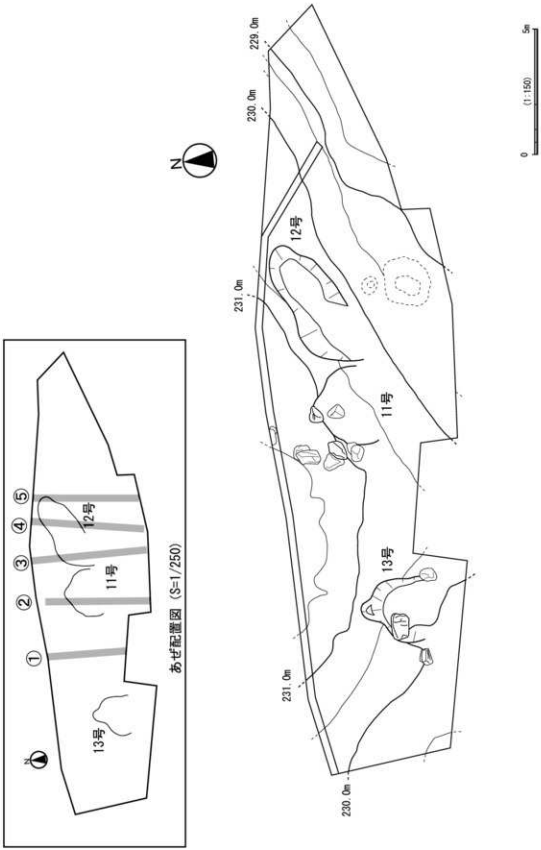
第１層　暗褐色土層　表土直下の旧地表面。
第２層　（暗）茶褐色土層　地山の茶褐色土に似ている。流れ込みか？
第３層　黒褐色土層　～径10cm大の礫を多く含む。しまりなくボロボロの土。
ベース　暗赤褐色土層に掘りこまれており、壁・立ち上がりは黄褐色土層になる。

出土遺物　なし

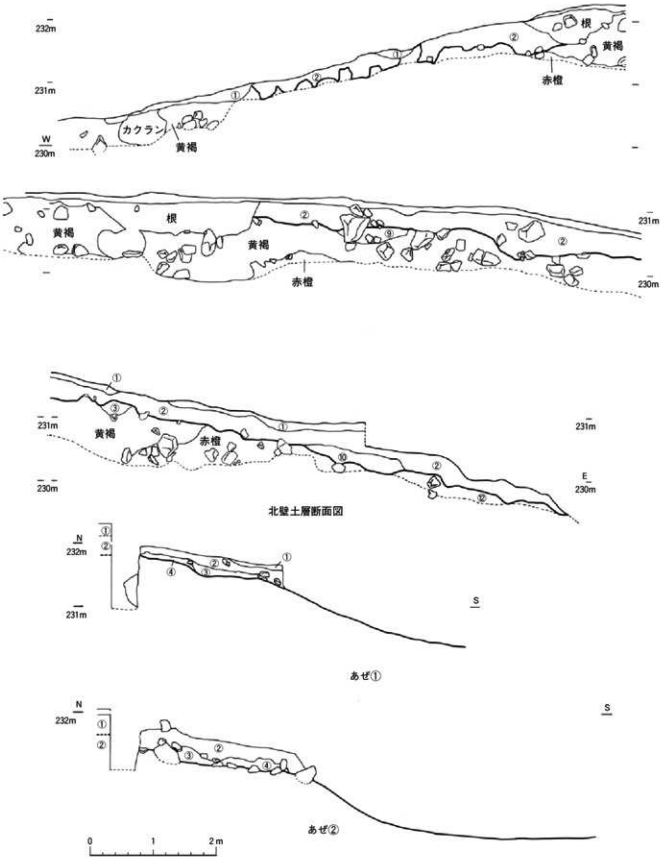
第３節　遺　　物

表土層から縄文土器２点が出土している。１点は、縄文早期末から前期初頭の外面に条痕文のほどこされた土器である。もう１点もほぼ同時期のものと思われる。ともに径約３センチの破片であり、遺構出土ではないが、近隣に縄文時代の集落が存在した可能性が考えられる。

土坑付近では、大型の戸室石が集中していたが、矢穴痕や刻印のある石は確認できなかった。



第６図　遺構全体図（Ｓ＝1/150）

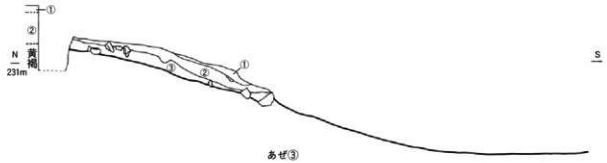


北壁土層断面図

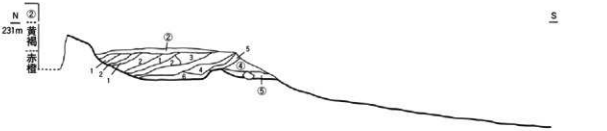
あぜ①

あぜ②

第７図　土層断面図①（S=1/60）

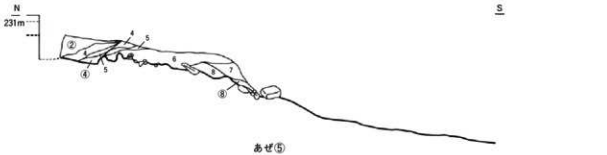


あぜ③



あぜ④　西面

あぜ④　東面（反転）



あぜ⑤

第8図　土層断面図②（S=1/60）

第4章　ま　と　め

俵ニカヤマノヤマ丁場跡の調査は、400㎡という狭小な面積の調査ではあったが戸室石切丁場の最も早い時期に属する丁場跡としては初の調査となった。わずか3基のみの採掘坑調査であったが、そこから得られた特徴を列記すると以下のようになる。

①採掘坑の形態は不定形で、規模は3ｍ前後を測る比較的小さなものである。

②丁場内には大礫の露出が少ない。調査区外に展開する部分についても同様である。

③矢穴・ノミ痕跡等を残す礫材が無く、13号土坑のように坑内に残る礫材でも加工痕跡を見ることができない。

④石材採掘・加工に伴う遺物が出土しない。

①については、採掘坑が小さい＝得られる石材も小さいと判断でき、最小限の加工で一つの石垣材を得ようとする意識がそこに働いているものと考えられる。また本丁場が位置する俵町付近は戸室山山麓でも裾（縁辺）部に位置することから、もともと大礫が得難い地域であることにも起因しているのであろう。②の露頭礫が少ないことも、できるだけ（採掘坑を掘ってまで）礫材を探索せず、採掘坑を掘って礫材を得る前の段階で露頭礫材が消費された結果と見なすことができるのではあるまいか。③・④については、石垣材加工のサイクルが大きく影響しているものと考えられる。矢穴・ノミ痕・刻印などの加工痕跡を残さない、採掘・加工に伴う遺物が出土しないということを、丁場内における石垣材への加工が最小限であった結果であると想定するならば、採掘された石材はかなり未成形な段階で金沢城普請場にもたらされ、普請場において諸々の加工が施されたと言える。実際、文禄・慶長段階の金沢城石垣は自然石積・割石積などのそれほど石垣材への加工を要しない積み方が為されていることもその徴証といえよう。

戸室石切丁場の確認調査を進めている金沢城研究調査室では、この「小さな礫材」「小さな採掘坑」「最小限の労力」を積極的にとらえ、これらの諸条件を満たす丁場として「戸室山麓の前山城」が金沢城初期の石切丁場として選択されたとする。その選択は「石材採掘と加工技術とが密接かつ合理的に関わると考えられる」中で行われたものであり、端的には石材採掘・加工技術の進化＝戸室石切丁場域の拡大、とみなせよう（金沢城研究調査室2004）。しかしその一方で、石材採掘・加工技術の進化は戸室石切丁場域の拡大（前山城→戸室山・キゴ山本体への奥進）による必然であったと見なすこともできる。これは加工技術の系譜（自発的か他地域からの伝播か）とも大きく関わる問題でもあり、今後の発掘事例の増加・研究の深化が望まれる。

引用・参考文献

紺野義夫　　1993　『石川県地質誌』　石川県・北陸地質研究所

冨田和気夫はか　2005　「戸室石切丁場調査概要」（『金沢城研究』第3号　金沢城研究調査室）

金沢城研究調査室　2006　『よみがえる金沢城１－450年の歴史を歩む－』

同　　2004　「平成16年度戸室石切丁場確認調査の概要－俵大池南丁場Ａ群－」（現地説明会資料）

同　　2006　「平成18年度戸室石切丁場確認調査　別所戸室権現下丁場跡（トイタビラ地区）現地説明会資料」

遺跡完掘状況（西から）

遺跡完掘状況（西から）

黒褐色土堆積状況

11号土坑（西から）

12号土坑（西から）

図版 2

12号土坑（西から）

作業風景

13号土坑断面

13号土坑内石

13号土坑完掘状況（北から）

北壁断面①

北壁断面②

北壁断面③

北壁断面④

あぜ①（西面）

あぜ②（東面）

あぜ③（西面）

あぜ④（西面）

図版 4

あぜ⑤（西面）

調査区現況（着手前）

11号土坑着手前

12号土坑着手前

報告書抄録

ふ り が な	かなざわし　たわらにかやまのやまちょうぼあと
書　　名	金沢市　俵ニカヤマノヤマ丁場跡
副 書 名	道路バリアフリー化促進（交安１種）一般県道芝原石引町線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	和田龍介、伊藤さやか
編 集 機 関	財団法人　石川県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒920－1336　石川県金沢市中戸町18番地１　電話　076－229－4477
発 行 機 関	石川県教育委員会・財団法人　石川県埋蔵文化財センター
発行年月日	西暦2007年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （新）	東経 （新）	調査期間	調査面積	調査原因
たわら 俵ニカヤマノヤマ丁場跡	いしかわけんかなざわし 石川県金沢市 たわら 俵 まちない 町地内	17201	（新発見）	36度 32分 2秒	136度 43分 15秒	20050427 ～ 20050527	400㎡	道路バリアフリー化促進（交安１種）工事一般県道芝原石引町線

所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
俵ニカヤマノヤマ丁場跡	散布地 生産遺跡	縄文時代 江戸時代	石材採掘坑３基	縄文土器	

要　　約	金沢城石垣構築に伴う石切丁場跡である。13基（内発掘調査で３基）の石材採掘坑を確認した。

金沢市　俵ニカヤマノヤマ丁場跡

発行日　平成19（2007）年３月31日

発行者　石川県教育委員会
〒920－8575　石川県金沢市鞍月１丁目１番地
電話　076－225－1842（文化財課）

財団法人　石川県埋蔵文化財センター
〒920－1336　石川県金沢市中戸町18番地１
電話　076－229－4477
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印　刷　株式会社　山越